

ヨーロッパ中世都市の女性と宗教諸施設

— 選択の幅と現実性 —

上 條 敏 子

はじめに

後期中世ヨーロッパの史料にはベギンという言葉が散見される。この言葉は、認可された修道会に連なることなく、特に修道院に入るのでもなく宗教的生活を送る者をさし、そうした生活を送る者はことに女性に多かった。この動向は、現在のリエージュ近郊で十三世紀までにはじまり、世紀を通じて北西ヨーロッパに拡大、十三世紀半ばのケルン市では成人女子人口の 6.5 % を占めたとされる。

1311 年のヴィエンヌ公会議は彼女たちの地位について、従属の義務、禁域の義務、財産を放棄していない点を指摘して、*religiosae* 「修道女」ではないと明記している。しかし、十三世紀の終わりにトゥルネのギベールが嘆いたように彼女たちは、修道女とよばれるべきか否か、出現してから相当の期間、同時代人の目にはそれほど明確でなかった。

煩瑣になるが、重要な論点になるので史料に即してこの点を確認しておきたい。ヴィエンヌ公会議決議の帰結として十四世紀初頭に公布されたクレメンス令には、「俗にベギンとよばれる女性たちは、従属を誓わず、財産を放棄せず、認可をうけた会則に従ってもおらず、決して修道女ではない」*Quum de quibusdam mulieribus, beguinabus vulgariter nuncpatis, quae null promittent obedientiam, nec propriis renuncient, neque profiteantur aliquam regulam approbatam, religiosae nequamquam existunt* とある。修道女を表現するタームとしてレリギオーザエ *religiosae* という言葉を用いた上でベギンは修道女ではないと述べているのである。しかし、1273 年当時に、トゥルネのギベールは「われわれの方には、部分的には俗人の作法に従っているが部分的には律に則っているために、修道女とよぶべきかわからない女性たちがある」*apud nos mulieres alias, de quibus nescimus utrum debeamus eas vel moniales appellare, partim enim utuntur ritu saeculari, partum enim regulari* と述べており、ベギンをモニアーレス *moniales* 修道女と呼ぶべきなのかどうかかわからない、と教皇に報告していたのであった。

今日でも教会法に基づく定義では、クレメンス令文言に則って、ベギンは修道女ではないと説明することが慣例となっている。しかし、史料に即して、発現当初における、人々の修道士、また修道生活に対する認識のありかたを考慮するなら、初期のベギンを修道女と厳格に区別することは適当でないと考えた。そこで、ここでは十四世紀初頭までを対象にベギン

をも修道生活者に含め議論する。

限られた時間の中で今日特に問題にしたいのは、中世における修道生活の様々な形態のなかで女性にとって可能な選択はどのようなものであったかである。本報告では、ベギンを含めた広義の修道女について、中世都市の女性に開かれた修道生活の選択の幅と可能性に焦点をあてて検討することにした。

一、先行研究と本稿の課題

ベギン運動の生成および展開については、これまで多くのことが言われてきた。多様な着眼を、大別すれば信仰生活への欲求の高まりに関連した問題、修道院情勢をめぐる問題、教会ヒエラルキーにおける女性の地位の問題、結婚適齢期の男女比の不均衡等にかかわる問題、都市化に付随する問題にわけられよう。信仰生活への欲求の高まりという点では、この時代、従来修道士のものであった実践が俗人の生活に入り込む現象がみられたという。修道院情勢については1215年、第四ラテラノ公会議による新設修道会の設立禁止が著名である。また、個別の修道会の動きとしては、プレモントレ会、シトー会による自派につらなる女子修道院の増加を阻止するための試みが注目されている。禁欲を課された修道士にとって、スキャンダルを避けながら女子修道院の設立と運営に携わってゆくことへの難しさもあったということであろう。教会における女性の地位は、女性は女性であるがゆえに司祭職の執行を認められず、女子修道院長であってもミサや告解聴罪の執行は認められず、いってみれば、教会ヒエラルキーから疎遠な位置に置かれていた。独立した女子修道会の認可の可能性はきわめて低かったことになり、このことも新しい動向と関連していよう。都市が新たな環境を提示した、と指摘する研究者もある。都市化に付随して、以前であれば家族のなかに包摂されていてみえなかった女性の問題が顕在化した側面もある。おそらくは、これらのうちの複数の要因が、相互に作用して新たな類型の修道施設への需要が喚起されたというべきであろう。

しかし、これらの諸要因のうちわけてもこれまでの研究で注目を浴びてきたのが、ビュッヒャーのいうフラウエンフラーゲ **Frauenfrage** (「女性問題」)——彼の用いた元来の言葉では「女性にとっての天職である、妻になりかつ母

ベギン運動成立・発展の背景と考えられてきた要因

教会改革の動向

- 清貧運動
- 巡歴説教師の増加
- 信仰生活への欲求の高まり
- 穩修女 (reclusen) の増加
- 異端問題
- 神秘主義思想とりわけキリストの花嫁・純潔の理想

修道院情勢

- 第四ラテラノ公会議
- プレモントレ会・シトー修道会の修道女政策
- 女子修道院不足
- 修道女に対する修道禁域の強制
- 修道女の司牧責任の問題
- 修道院持参金

教会ヒエラルキーにおける女性の地位の問題

- 司祭職の男性による独占

女性問題

- 上層階層における職業生活の可能性の欠如
- 十字軍や封建戦争による女子人口の相対的過剰
- 結婚持参金の高騰

都市化

- 都市化に伴う問題の解決
- 新興ブルジョワジーの女性に修道生活への需要がおこった
- ツンフトの形成による女性労働力の排除
- 家に包摂されていた独身女性の問題が表面化した
- 都市に若年女子労働力が集まった
- 都市の下層の女性を保護した

になること」を達成できなかった女性の処遇の問題、と二つの指導的な修道会によってとられた女子修道院併合阻止のための措置であった。女子修道院制度をめぐってはとりわけプレモントレ会およびシトー会の立法に注目があつまり、このふたつの修道会の動向がベギン会の登場と大きくかかわったと考えられているのである。そして、ベギン運動が典型的には女性によって担われた運動であった点にかんがみるなら、そうした観点にも相応の説得力を認めてよいだろう。

問題は、それらの説明が、どれだけ現実の経緯に一致しているかであろう。ビュッヒャーが女性問題について論じたのは一九世紀末、彼はベギンになった女性の社会的背景、出自について明確な認識をもっていなかった。しかし、彼の小著『中世の女性問題』はよく読まれ、ベギンとはベギネンハウス **Beginnhaus** に居住する貧しい女性とのイメージを流布させた。現在では、彼はこの点について極めて激しく論駁されている。

グルントマンの研究は一昨年英訳が刊行され、依然大きな影響力をもっているが、彼がプレモントレ会、シトー会による修道女排斥の措置に言及した当時、技術的な条件から、すべての修道院の建設動向を視野にいれた分析は不可能であった。そのため、グルントマンの議論には立法への着目がさきにたち現実の修道院設立動向の分析のうえにたっていないうらみがある。彼の『中世の宗教運動』は、ドイツ圏のフランシスコ会、ドミニコ会の男女別修道院設立数をあげ、ドイツでは女子修道院の方が男子修道院よりはるかに多かったかの印象を与えるものであった。

そこで、ここでは初期中世から十三世紀にいたる女子修道院の設立動向を追跡し、修道院設立数というごく基本的な事項を踏まえたところに生まれる新たな認識の地平を示したい。また、修道女、ベギンの社会的背景を、シュラインブーフとよばれる豊富な史料群で知られるケルン市のデータに基づいて分析することにする。

前述したように女性問題というときにビュッヒャーが考えていたベギンとはベギン館 **Beginnhaus** に住む貧しい女性であり、ベギンと言えば貧しくかつベギン館に住んでいるというイメージが彼の著作により一般に流布したからである。もちろん、この点は、多くの論者に後に批判されることとなり、グルントマンらは初期ベギンの出身階層を高く想定していたが、居住形態の多様性ともあいまって、ベギンの出身階層の問題は全容を解明されたとはいいがたい。そこで、ここで再びベギンの出身階層を修道女との比較において再確認してみることとする。

女子修道院数については、コンピューターの導入により、修道院設置数を打ち込んでデータとして蓄積することが格段に楽になったという事情があり、この十年程の間に重要な成果があらわれている。今日はその成果をもとりこむ形で修道院制度の展開のなかにベギン運動を位置づける作業をおこないたい。個別の史料の読み込みよりはむしろデータの解析が今日の私の仕事となる。

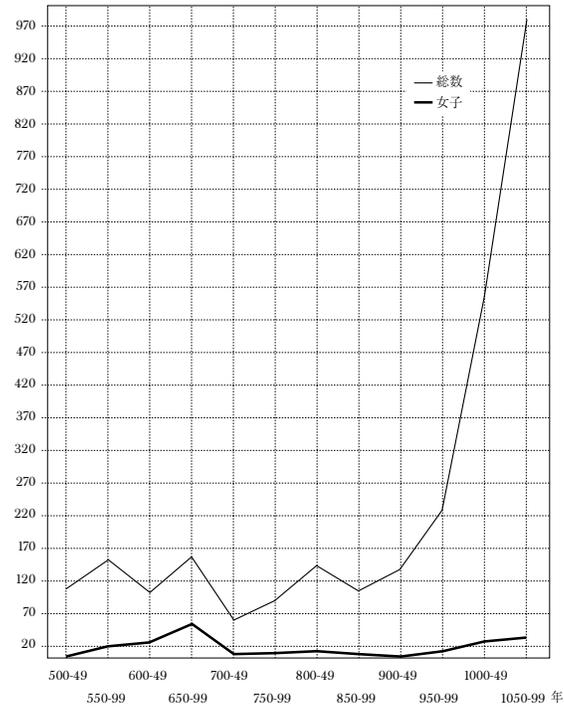
二、修道院設立動向にみる基本的特徴

グラフ A (上) は大陸における修道院の設立動向を示している。ふたつの線がみえる。うえの線が修道院設立総数、下の線が女子修道院設立数である。ふたつの点を確認したい。初期中世を一貫して、女子修道院の数は男子修道院より少なかった。また設立数のギャップは一〇世紀以降拡大した。グラフ A (下) は、同じ数値をイングランドについてまとめたものである。ふたつのグラフを比較して看破されるイングランドの特徴は二点ある。まず、男女修道院設立数のギャップそのものが大陸にみる程顕著でない。また、一〇世紀以降におけるギャップ拡大のありかたもイングランドでは微細であった。おそらくこの差異は、一〇世紀という年代から推定してクリュニー派の改革により大陸で男子修道院のみが激増したことによっているのだろう。残念ながら、シューレンブルクの数値を借りたこのグラフでは一〇五〇年までしか、設立動向を辿ることができない。しかし、数年前に発表されたヴェナルデの新しい研究によって、その後の修道院設立動向が把握できるようになった。グラフ B を参照されたい。グラフ B (上) に引かれた垂直の線の左側は、さきのグラフで辿られた年代に相当し、右側が新たに明らかになった十二世紀以降の設立数である。ここでグラフにのっているのは女子修道院のみである。女子修道院が本当の意味で飛躍的増加をみるのはようやく十二世紀にはいつてからであったことがみてとれる。この十二世紀とはプレモントレ会、シトー会の勢力がでてくる世紀にあたっており、これより後の年代のみをみて女子修道院の設立を論じると、非常にそれが活発であって、男子修道院のそれをうわまわったと見ることも可能であるが、それは錯覚であって、女子修道院の設立は男子修道院のそれに追いつこうとして、この年代によりやく本格的に増えはじめたと言えるだろう。このことはグラフ B (下) と比較することで明瞭となろう。なお、ヴェナルデは、男子修道院の設立は数え切れず統計をとるのは不可能とも述べており、この時代においてなお、男子修道院の数が女子修道院の数をうわまわっていたと考えてよい。

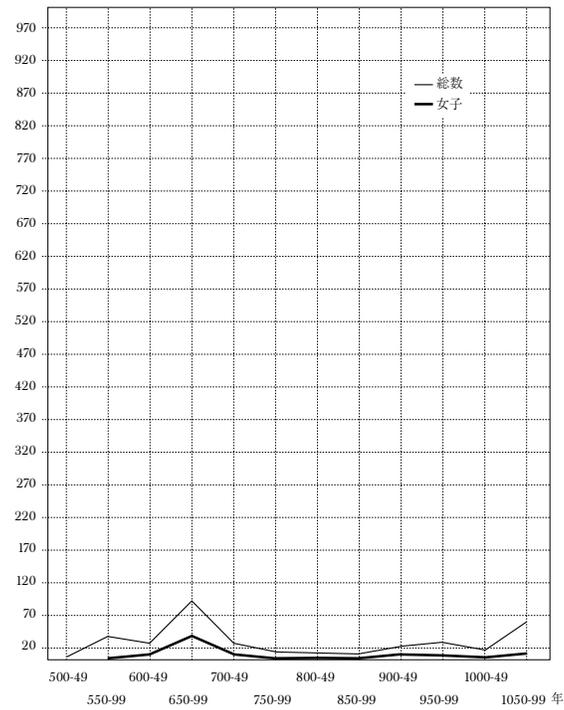
つぎに中世の女子修道院について既知の事項とされる社会的出自については、十一世紀までについていえば、それはほとんど専ら貴族に占められていたという。この状態が変化する可能性があるとするれば、それは新しい修道改革の波が押し寄せる時期であろうと思われる。というのもクリュニー修道会は女子修道院の設置にほとんど関心を払っていなかった。それに対して、プレモントレ会、シトー会は当初は、女性の参加を容認、あるいは黙認する形をとっており、ここに大量の女性たちが吸収され、修道女の出自にも変化をもたらす可能性があった。もっとも、新しい修道会の登場による社会的出自の変化についてはネガティブな見解もだされている。しかし、それはどちらかといえばアングロサクソン系の論者からであり、先刻 A のグラフ (下) で確認したように、イングランドは男子修道院数と女子修道院数の差がもともとあまりない土地であって、設立数のレベルそのものが改革期にも跳ね上がることはない特徴をもつ。したがって、イングランドでは、修道院は後の時代まで貴族的性格をより濃く残したとしても、事情は、大陸では異なると解釈できるのである。グラフ C を参照

A

修道院設立動向（大陸）



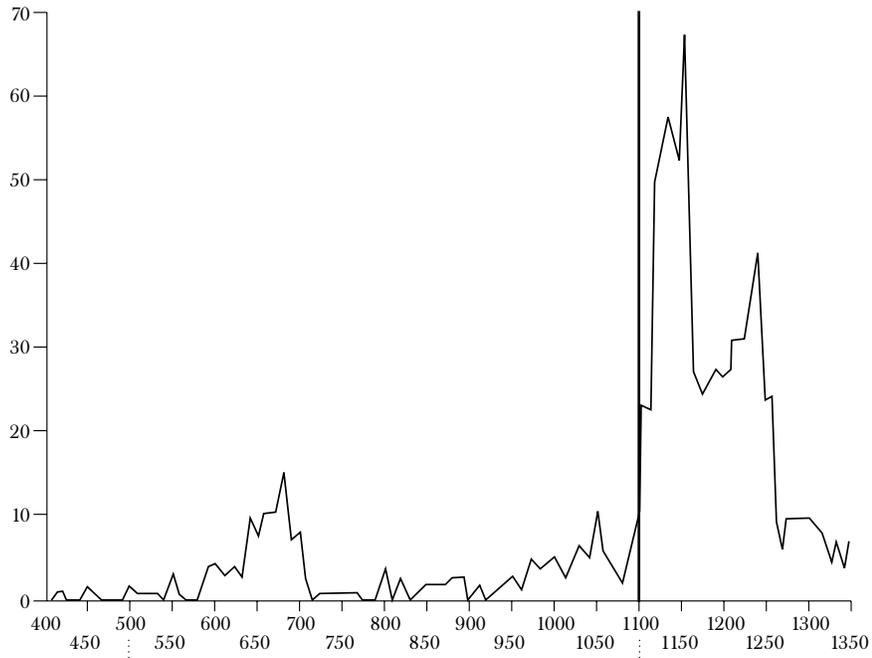
修道院設立動向（イングランド）



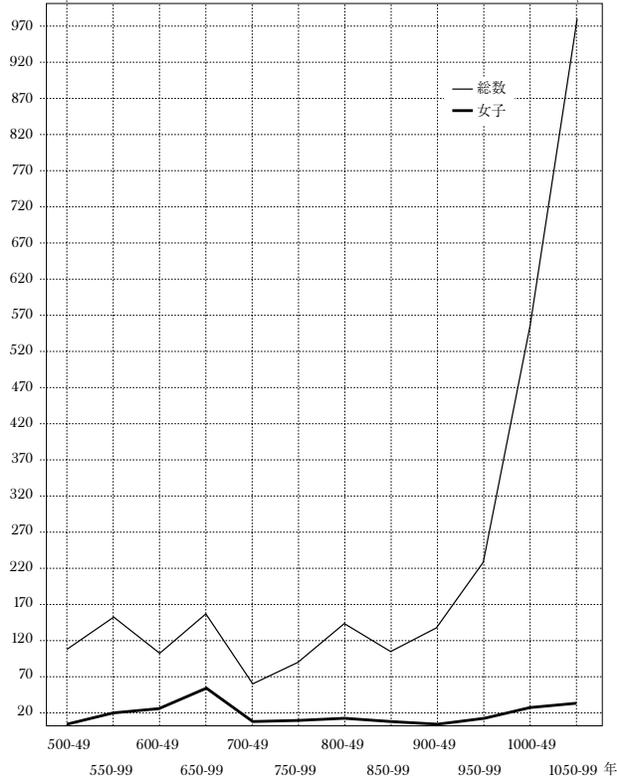
Schulenburg, J.T., *Women's Monastic Communities*, p.213. より作製

B

修道院設立動向（1100年以降を含む）設立数



修道院設立動向（大陸）

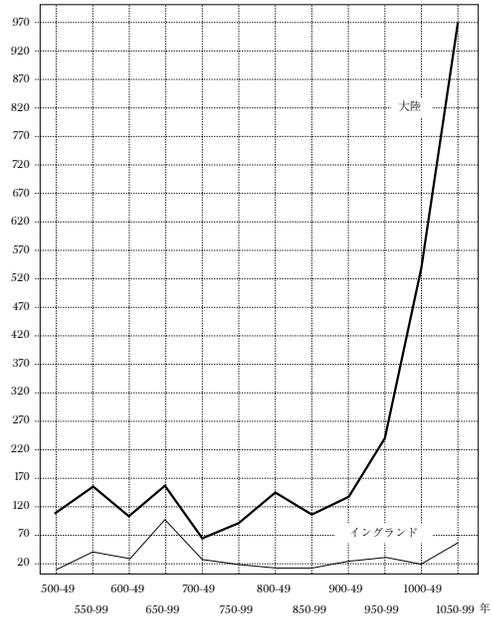


されたい。これは、設立動向についてイングランドと大陸を比較したものである。明白なようにイングランドにおける修道院の総数は、クリュニー改革以後もほとんど変化がない。

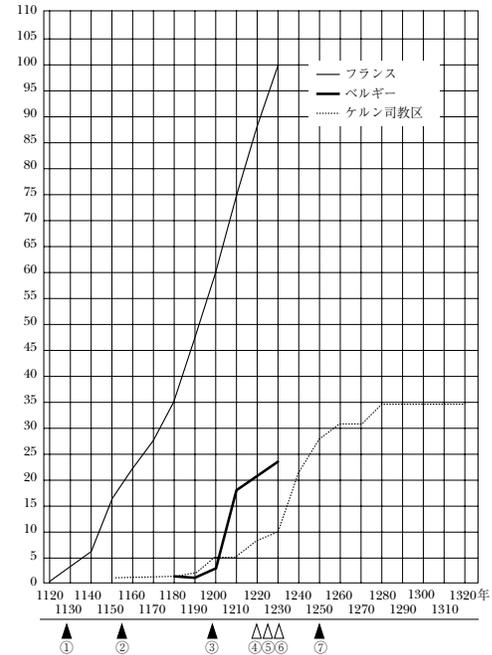
もちろん中世中期には人口は増加の途にあったから、修道制の繁栄は、それが人口増加をうわまわるものでない限り、修道院の増加によって、より広い階層の人々が修道生活に入ったことにはならないが、現実の設立動向からみて修道院設立数は人口増加を上回る。つまり、新しい修道院設立ラッシュをもって、おそらくはより広い階層から修道士、あるいは修道女が現れる事態にいたったと推測してよいのである。そして、この変化は実際におこったようである。さきのシュルツ氏の報告にもあったように都市に拠点をもつ家門からの人材をシトー会は歓迎していた。とりわけ興味深い聖人伝が紹介されており、同様の成功物語りを修道女について期待したいところであるが、残念ながら女性について、類似した内容の聖人伝は知られていない。しかし階層の変化そのものは女子修道院でもありえたと思われる。十二世紀以降の女子修道院の増加はそれほど顕著なものであった。

プレモントレ会の試みについて付言するならば、プレモントレ会では男子修道院に併設された形の女子修道院が多かったが、ある時点から修道士と修道女が混在する状態をやめようということで男女併設修道院（二重修道院）の解体が試みられ、その後は修道女の新たな受け入れを禁止することで修道会からの女性の廃絶を企図し、ある程度の成功をおさめた。プレモントレ会の決議と時を同じくしてシトー会女子修道院の増加がみられた、と当時の

C 修道院設立動向



D シトー会女子修道院総数



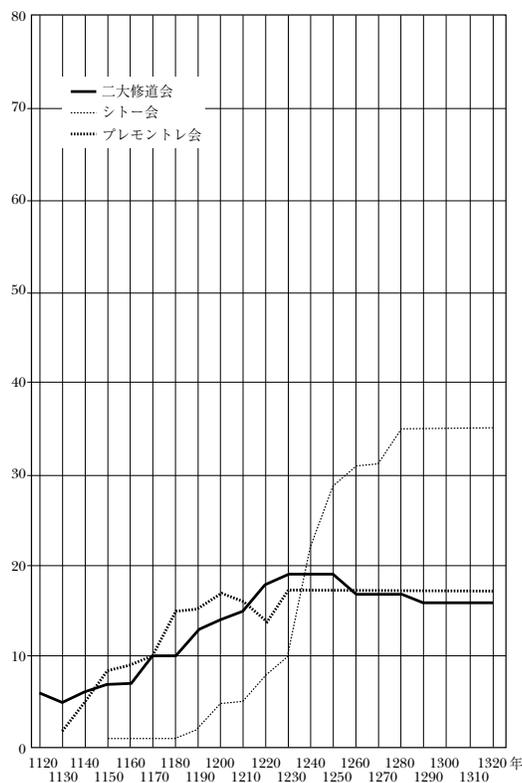
- ①1129年：エロイーズ、バラクレー女子修道院に移る
- ②1153年：クレルヴォーのベルナルド死
- ③1198年：プレモントレ会、教皇より、修道女加入拒否を許可される
- ④1220年：シトー会総会、将来における女子修道院の併合禁止決議
- ⑤1225年：シトー会総会、将来における女子修道院の併合禁止決議
- ⑥1228年：シトー会総会、将来における女子修道院の併合禁止決議
- ⑦1251年：シトー会、教皇より、女子修道院併合の禁止を許可される

記録にはある。シトー会はやがて、プレモントレ会同様に、女子修道院の無尽蔵な増加を歓迎しなくなり、その加入制限を試み、あいつぐ総会決議をあげた。しかし、その効果はケルン司教区のようなヨーロッパ北部ではきわめて薄いものだった。現実の建設動向をみると、シトー会による女子修道院設立の波はフランスを十二世紀のうちに覆い尽くすが、それが現在のベルギーに波及するのは十三世紀のはじめにすぎず、さらにケルン司教区に至るにはそれから 20 年をまたなければならなかった。この点についてはグラフ D を参照されたい。左端を走る線がフランス、右隣がベルギー、右端がケルン司教区における修道院数を示している。設立の波が大陸の南から北を目指しさらに東方に及んでいったことがわかる。ケルン司教区における設立の波は比較的遅い時期にはじまっており、この時期と総会による女子修道院の加入制限決議（グラフ下の白抜き三角）を較べると、総会決議が繰り返された時期に遅れてケルン司教区の女子修道院が激増する結果となっている。ケルン司教区の場合にはシトー会の総会決議は完全にないがしろにされており何の効果もなかったといわなければならない。結果、1280 年までにケルン司教区のシトー会女子修道院は三十五を数え、他派の女子修道院の増加を加えると、司教区の女子修道院数は実に七十を超えるにいたる。（グラフ D2）

また、プレモントレ会の増加が止まるのと同じ時期に、シトー会女子修道院が増加し、その結果 1230 年を境として、女子修道院数において最大の宗派の地位はプレモントレ会からシトー会に移ったこともわかる。

ベギンの登場を史料に確認できるのも、やはりこの頃である。ケルン市において最初のベギンがシュラインブーフに現れるのは 1223 年。同市の支配層に属するパトリツィアートの女性であった。その後のベギンの増加はかなりしっかりした歩調をとり、十三世紀の中頃までには相当数に達した。そして通算してみれば 1400 年までに 169 のベギン館を数えるにいたるのである。その収容力についてみれば、その合計は間もなく司教区全体の女子修道院の収容力をうまわわったと見られる。グラフ E は、単独で史料にあらわれるベギン、ベギン館数、個別のベギンの推測生存年数とベギン館の平均収容力から試

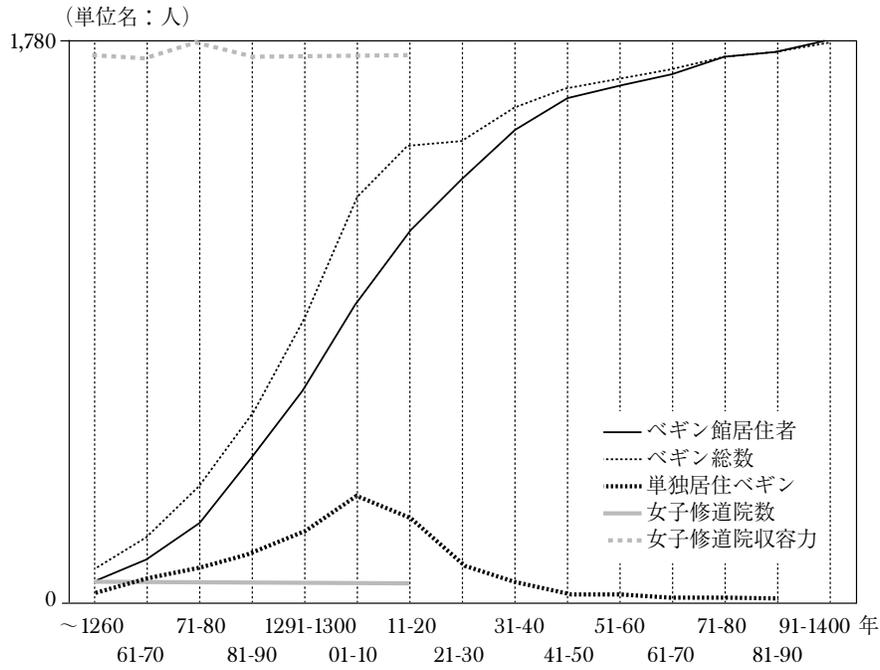
D-2 ケルン司教区女子修道院数推移



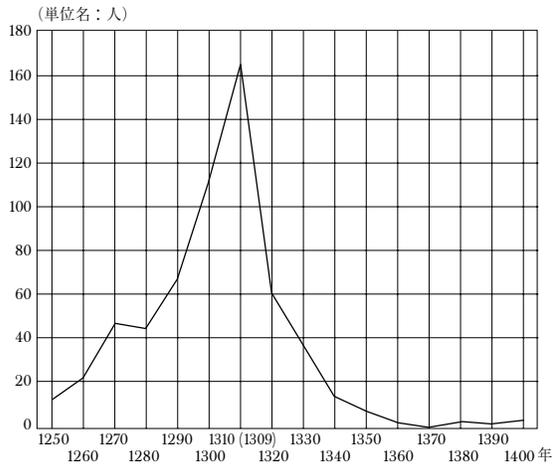
Stein, F. M., *The Religious Women of Cologne: 1120-1320*, 1977, pp.284-285. より作製

*二大修道会：ベネディクト会、アウグスティノ会

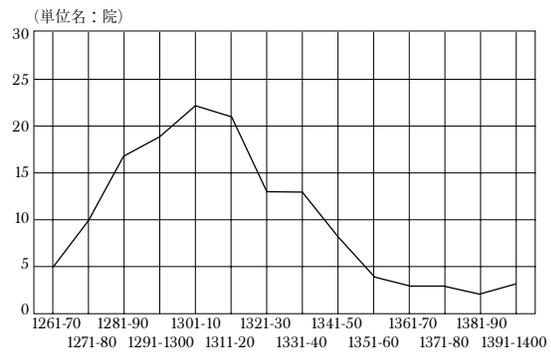
E ケルン市におけるベギンと修道女の数 (推定)



ケルン市の資産譲渡記録にあらわれたベギン (1250-1400 年)



ケルン市におけるベギン館の設立動向



Asen, J., Die Beginen in Köln, in: *Annalen des Historischen Vereins für den Niederrhein* 111, 1927, p.93. より作製。

※ケルン市に確認できるベギン館は 169 あり。設立年代を特定できないものは、グラフにのせていない
Asen, J., 1927, pp.93-4. より作製。

算したベギン総数を示している。ベギン館の居住者の増加が著しい十三世紀なかばには既に女子修道院の収容力は頭打ちになっており、ベギンの生活が当時の女子修道院にない包容力をもったことが洞察される。付け加えれば、ベギンの生活は、両親との同居、単独居住、ベギン館居住など多様な居住形態をとりえるものであったが、シュラインブーフでは史料の性格上財産の譲渡にかかわらなかった人々の動勢をつかみにくい。ここで把握できたのはあくまで史料に残った部分であったことを銘記し、ベギン運動は資産譲渡記録によって全体像を把握することが困難な裾野がきわめて広い運動であったことを申し添えておきたい。

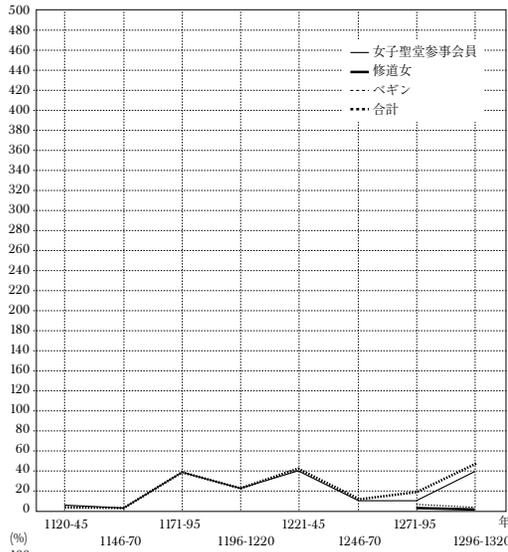
三、女子修道生活者の社会的背景と宗教施設の選択

女子修道生活者の出身階層の問題にうつりたい。ケルンについて年代をおって、女子修道生活者の出身階層の推移をみる。出身階層は便宜的に貴族、パトリツィアート、中流階層、下層市民の四つにわけられる。この分類において貴族のなかには騎士、ミニステリアーレスが、パトリツィアートには都市の支配層、政治にかかわり役職を占めた家門が、中流には富裕な商人など、下層には鍛冶屋等が含まれている。史料が示す絶対数でみた場合、全体として女子修道生活者を最も輩出していたのがパトリツィアート層、ついで中流階層であったことがわかる。(グラフ F) 女子修道生活者の出身階層の変化を最も顕著に示すのがグラフ G である。このグラフからは、貴族層が修道生活者に占めた比率の低下ぶりがわかる。それは1120年には100%であったが、十二世紀後半にはおよそ50%まで低下し、十三世紀にはいりさらに低下しおよそ10%になってしまう。貴族層の比率低下は何に対応するのか。最初の低下は、プレモントレ会の登場時期、二度目の増加はベギン会の普及と一致したものとなっている。改革修道会の登場によって女子修道院は広い階層に開かれ、さらにベギン会の出現によって修道生活の選択の可能性はすべての階層に開かれていく、この過程が十二、三世紀であったといえよう。

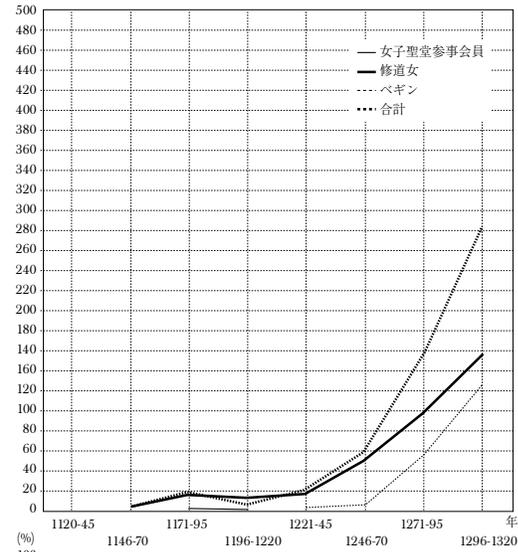
しかし、そんなに修道女を増やしてどうするのか。純潔といえば聞こえはいい。だが、神にささげられた、ということは生身の男性には禁じられたということであり、こうした動向を歓迎しない男性も多かった。ベギンの根絶を要求した一群の人々には女性に袖にされた男性までもが加わった。しかし娘をもつ父親ともなれば、思いはまた別である。修道生活の重要な担い手となりつつあったパトリツィアート層からは多数のベギンも輩出されているが、その理由のひとつは経済的負担にあった。パトリツィアート層における修道生活の選択が某かを語るであろう。未婚の娘を、彼らははできることであれば女子修道院にいれたがっていたようにみえる。しかし、娘の数が多くなるとベギン館の活用が増している。グラフ H では、未婚の娘の数が、宗教施設の選択におよぼす影響をみようとした。修道生活に入る娘の数が一人、二人の場合には、その多くは女子修道院に入っている。しかし、家門から一定数——四人程度——をこえる娘が修道生活にはいる場合にはベギン会が選択されやすい。未婚の娘がさらに多い場合には全員を修道院に入れることは難しく、すべての家門がベギン館を利用

F

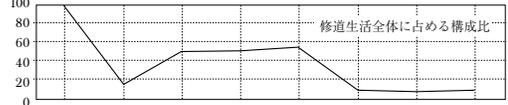
貴族層の修道生活 (ケルン)



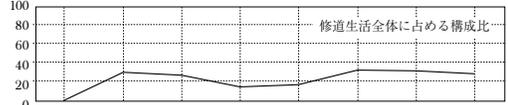
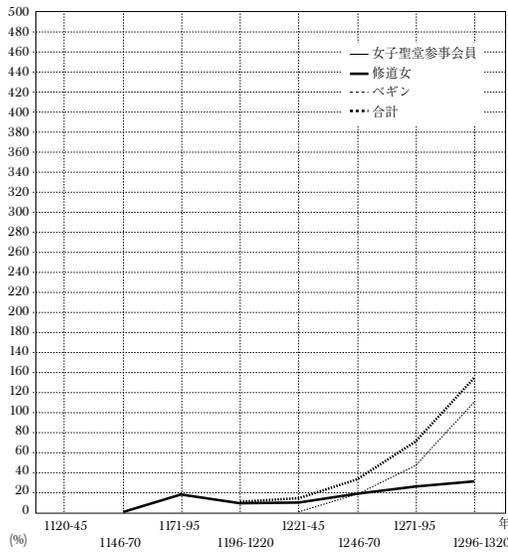
パトリツィアートの修道生活 (ケルン)



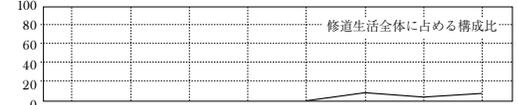
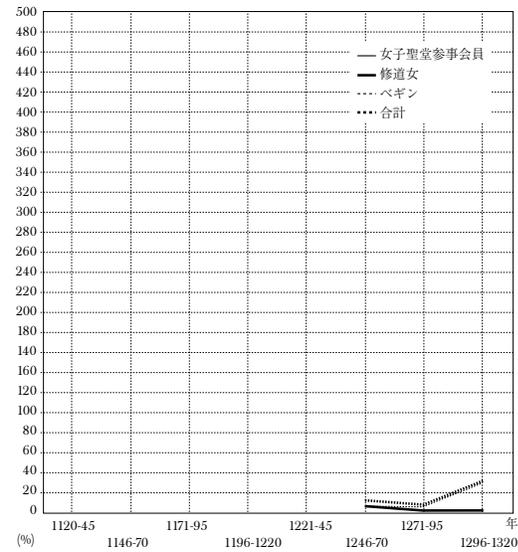
G



中流階層の女性の修道生活 (ケルン)



下層民の修道生活 (ケルン)



Stein, F.M., The Religious Women of Cologne: 1120-1320, 1977, p.274. より作製

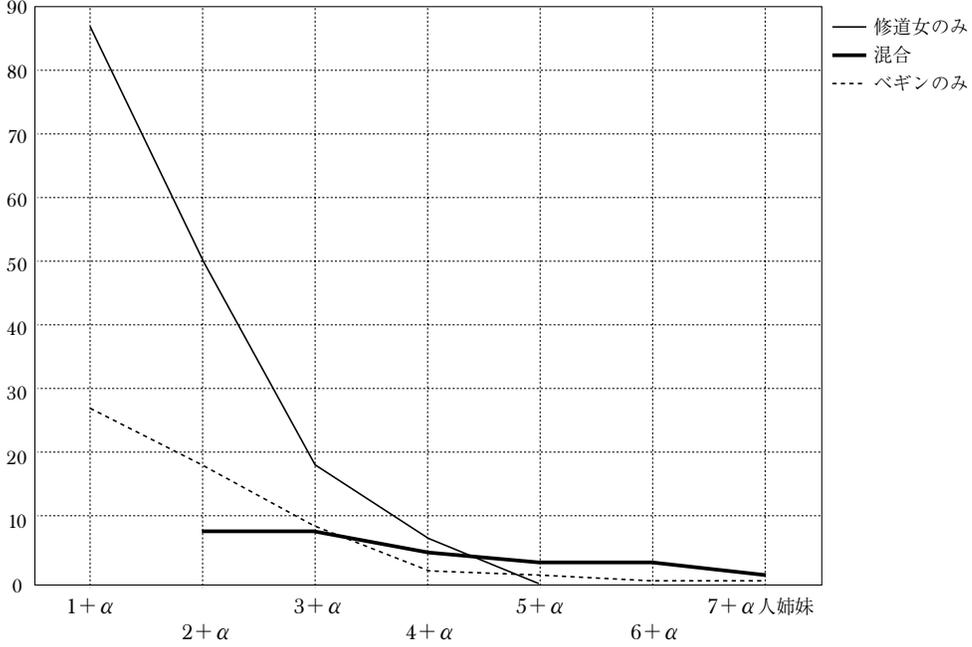
Stein, F.M., The Religious Women of Cologne: 1120-1320, 1977, p.274. より作製

H

ケルン市 250 パトリキアート家門の未婚女性
(1120-1320 年)

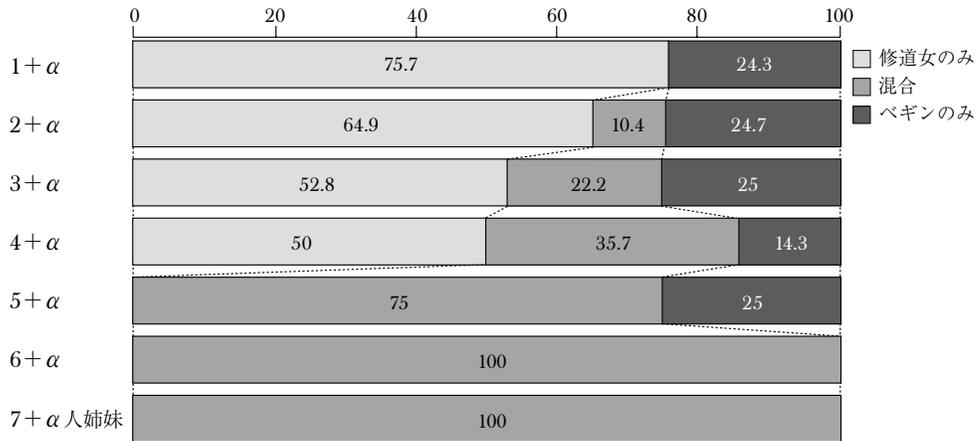
実数

(単位：家族)



百分比

(単位：%)



していたことがみてとれる。

修道院に入るために持参金を要求することはシモニア（聖職売買）として教会の禁じるどころであった。しかし、この慣行は中世においては一貫して存続し続け、このことはとりわけ女子修道院についてあてはまった。その金額がどれ程のものであったか。一例では 30 マルクと明記されており、平均的な生活で 10 年は悠に食べていける金額にあたる。きわめて高額といえよう。そして結婚のために必要な持参金は、富裕な階層では修道院持参金を上回ったというのである。

教会法の認める修道女とベギンには、前者は教会法や所属する修道会の定める要件を満たす必要があったが、立地上の制約などについて修道会に連ならないベギン会の場合には制約がなかった。そのため、多くの場合、生活の便を第一として都市への立地がなされている。対して、女子修道院は一般に郊外に位置していた。そのうえ、修道女は修道院からの外出を禁止されていたから自らの労働によって生活する糧を得るという点において制約が大きかった。対して、ベギンは、昼間の外出は許されており収入を得る手段はより多様でありえた。十三世紀にロベール・ド・グロチェスターは、ベギンの生活は他者の負担にならないという点で托鉢修道士以上に優れた生活様式であると内輪でのべたというが、それにはこうしたお家の事情があったのである。

ベギンの経済活動についてはまとまった研究は、ほとんどないものの一般に織布関連の諸工程に携わったことが知られている。また、ノイマンは、マインツ、シュトラスブルク、ケルンでベギンが従事していた職業を列挙しており、ベギンによる多彩な経済活動をかいまみせる。そこには、読み書き教育、捨て子・ストリートギャングの世話、救済院での病人看護、貧者、巡礼に対する奉仕、訪問による看護、死者のための祈りと通夜・葬列への参列、家事（洗濯・調理）、職布、糸つむぎ、裁縫、ビール醸造、製粉、写本、巡礼の代行、印刷所などがあげられている。

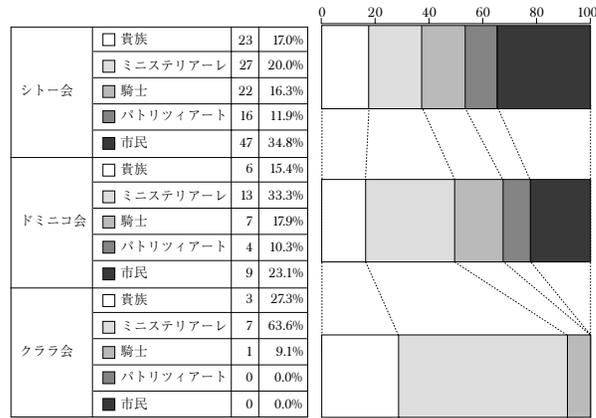
ノイマンのほかでは、ベギンの経済活動についてはフィリップペン、オリスラーヘル、シュミットに比較的まとまった研究をみいだすことができる。その活動内容が多岐にわたっていることはすでにふれたが、病人看護のほかで四人が共通してあげているのが織布産業に関連した労働である。

そこで、ベギン運動の中心となった地域がどのような社会経済的背景をもっていたかをここで確認しておこう。エンネンの『中世都市』によれば、中世ヨーロッパにおける都市文明の二つの中心は（一）イタリア、（二）ライン河とセーヌ河に挟まれた領域であった。後者こそがベギン運動の中心地と一致している。このライン河からセーヌ河に至る都市化された地域の特色は、輸出用製品の生産と、より地域的な通商との多彩なつながりをもつこと、また職布が基幹産業であることの二点である。

アンマンは、織布の産地を調べ、全 150 都市のうち 90 が低地地方にあったとしている。その販路は、低地地方のものは、イタリア方面もしくはハンザ同盟によってバルト海へと広

I

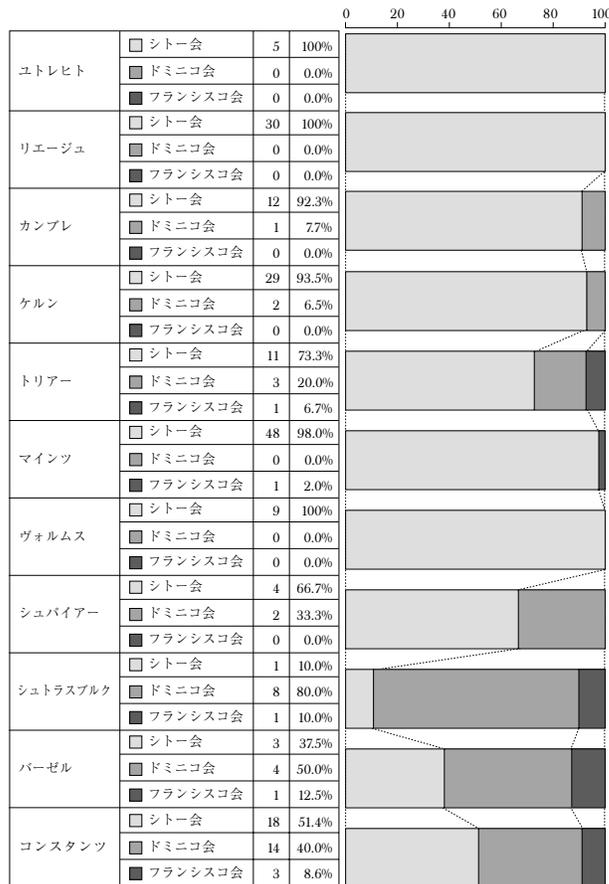
修道女の出身階層



1273年以前のパーゼル、カンブレ、ケルン、コンスタンツ、リエージュ、マインツ、シュバイアー、シュトラスブルク、トリアー、ユトレヒト、ヴォルムス各司教区について、出身階層を特定できる場合に限り統計処理してある。

Freed, J.B., Urban Development and the “Cura Monialium” in Thirteenth-century Germany, in *Viator* 3 (1972), p. 319. より作製

三修道会シェア



Freed, J.B., Urban Development and the “Cura Monialium” in Thirteenth Century Germany, in: *Viator* 3 (1972), p. 313 より作製 (数字は1228年以前についてのもの) 地名はおおむねライン河下流から上流にむけて配置してある。

がっていた。ケルンの布は、安価で、品質を問わない南東ヨーロッパを主な市場とした。ライン中流域は、中級品の布を産し、やはり広い販路をもった。

十五世紀シュトラスブルクの関税表にみる通過産品が知られている。「量では塩と魚類、価格では間違いなく織布が抜き出ている。織布ではフランドルとブラバントの高価な布、緋色の布、それほど高価でないオランダ、イギリスの布、並の品質のライン中流域の布がアルザスを通過していった。」

当時の織布は、現代日本でいえば車にあたる基幹産業であり、こうして国際的に取引される織布の都市の富の源泉であったと同時に、ベギンにとっては重要な生計手段であった。

おわりに

十二世紀の初頭まで女子修道院に入ることができたのは、貴族の師弟に限られていた。十二世紀の中頃にこの状況に変化がおり、都市の富裕な階層の女性から修道女の生活を選択する者が現れる。十三世紀に入ると新しくベギン運動がおり、都市に居住するより広い階層の女性にとって宗教的な生活の選択が可能になった。

ベギンの生活は自活への道を開いていたためその選択は富裕な家門にとっても恩恵のあるものであった。そして中流そして下層の人々にとって、ベギンの生活は事実上選択可能な唯一の修道生活であった。

十三世紀の修道女、ベギンの出身階層の貧しさについて、そのつましさについていえば、貧しいという表現は、初期中世の女子修道院長として君臨した王侯貴族の女性に較べれば相当につましい。しかし、都市上層民の関与の程度の深さから考えて、ベギンらの貧しさは十九世紀の歴史家ビュッヒャーが想定した貧しさとは相当程度異なった貧しさのようにみえる。

また、修道会の措置とベギンの増加の関連についていえば、十二、十三世紀における女子修道院、ベギン館の増加をもって、修道女が修道士の数を凌駕していたと考え修道願望は男子より女性のほうがつよかったかのように論じることは誤りであると考えられる。なぜなら、十一世紀以前に溯ってみるにより、当時の活発な女子修道院建設は、深刻な女子修道院不足を補う性質のものであったとみなさなければならないことがわかるからである。

この時期女子修道院に入るという選択は、都市の女性にとってはじめて現実的な選択となりつつあった。しかし、当時女子修道院の多くは、郊外に位置しており、禁域を課せられた修道女にとって生計を自らの労働によって維持することは現実的にも、課せられた日課との兼ね合いからも困難であり、女子修道院経営は、多くを多額の修道院持参金によらざるを得なかった。ベギンの生活は、都市への立地、自由な経済活動によって自活への道を開いており、より広い階層に開かれるとともに、修道理念の展開の上では、観想的な生活と実践的な生活を融合させた新しい修道生活の可能性をもっており、パトリツィアートはじめ都市の富裕な階層の支持を得ることができた。

文献目録

- ASEN, J., Die Beginen in Köln, *Annalen des historischen Vereins für den Nieder-rhein*, 111 (1927), pp. 81-180; 112 (1928), pp. 71-148; 113 (1928), pp. 13-96.
- BENNETT, J. M., ed. Elizabeth A. CLARK et. al. *Sisters and Workers in the Middle Ages*. 1989,
- BERLIÈRE, U., *Les monastères doubles aux XIIIe et XIIIe siècles*, Brussel, 1924.
- BOLTON, B., *The Medieval Reformation*. 1983.
- BOLTON, Brenda M., Mulieres Sanctae, *Sanctity and secularity: The church and the world*, (Studies in church History 10), Derek BAKER ed. Oxford, Basil Blackwell, 1973, pp. 77-95.
- BOLTON, B. M., Vitae Martum: a Further Aspect of the Frauenfrage. *Medieval Women. Dedicated and Presented to Professor Rosalind M.T. Hill on the Occasion of her Seventieth Birthday*. ed. D. BAKER. (Studies in Church History. Subsidia 1) Oxford, 1978.
- BÜCHER, K., *Die Frauenfrage im Mittelalter*, Tübingen, 1882
- BUGGE, J., *Virginitas: an Essay in the History of a Medieval Ideal*. 's-Gravenhage, 1975
- CHOJNACKI, Stanley, Dowries and Kinsmen in Early Renaissance Venice. *Women in Medieval Society*, S. M. STVARD ed., University of Pennsylvania Press, 1976, pp. 173-198
- DE KEYZER, W., Aspects de la vie béguinale à Mons aux XIIIe et XIVe siècles. *Autour de la ville en Hainaut. Mélanges d'archéologie et d'histoire urbaines offerts à Jean Dugnoille et à René Sansen à l'occasion du 75e Anniversaire du C. R. H. A. A.* 1986. pp.205-226.
- DEGLER-SPENGLER, B., Die religiöse Frauenbewegung des Mittelalters; Konversen-Nonnen-Beginen. *Rottenburger Jahrbuch für Kirchengeschichte* 3 (1984), pp.75-88.
- DELMAIRE, B., Les béguines dans le Nord de la France au premier siècle de leur histoire (vers 1230 – vers 1350). *Les Religieuses en France au XIIIe siècle*. dir. M. PARISSÉ, 1985. pp. 121-162.
- DELMELLE, J., *Abdijen en begijnhoven in België*, Brussel, 1973.
- ECKENSTEIN, L., *Women under Monasticism. Chapters on Saint-Lore and Convent Life between A.D. 500 and A.D. 1500*, New York, 1963.
- FONTETTE, M. DE, *Les religieuses à l'âge classique du droit canon*. Paris, 1967.
- FREED, J.R., Urban Development and the 'Cura Monialium' in Thirteen-Century, *Viator* 3 (1972).
- GRAUWEN, W. M., De vrouwelikereligieuzen in de Orden van de 12e en 13e eeuw. *Analecta Praemonstratensis* 44 (1968), pp.100-105.
- GREVEN, J., Der Ursprung des Beginenwesens. Eine Auseinandersetzung mit Godefroid Kurth, *Historisches Jahrbuch*, 35 (1914).
- GREVEN, J., *Die Anfänge der Beginen: Ein Beitrag zur Geschichte der Volksfrömmigkeit und des Ordenswesens im Hochmittelalter*, (Vorreformations-geschichtliche Forschungen, Bd.8), Münster i.W. 1912.
- GRUNDMANN, H., *Religiösebewegungen im Mittelalter: Untersuchungen für die geschichtlichen Zusammenhänge zwischen der Ketzerei, den Bettelorden und der religiösen Frauenbewegung im 12. und 13. Jahrhundert und über die Grundlagen der deutsche Mystik. Anhang: Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter*. 2nd ed. Hildesheim, 1961.
- GRUNDMANN, Herbert, Zur Geschichte der Beginen im 13.Jahrhunert, *Archiv für Kulturgeschichte*, Band 21, Leipzig, Berlin 1931.

- KIRSCHNER, J. and A. MOLTO, The Dowry Fund and the Marriage Market in Early “Quattrocento” Florence. *Journal of Modern History* 50 (1978)
- KOCH, Esther, Kloosterintrede, huwelijk en familie fortuin: De kosten van klooster en huwelijk voor adellijke vrouwen in zuidoost-Nederland in de late middeleeuwen. *De schaduw van de eeuwigheid, Tien Studies Over religie en Samen-lewing in laatmiddeleeuws Nederland aangeboden aan prof. dr. A. H. Bredero*. Utrecht 1986.
- KOORN, F. W. J., *Begijnhoven in Holland en Zeeland gedurende de middeleeuwen*, (Van Gorcum’s Historische Bibliotheek, 97), Assen, 1981.
- LAUWERS, M., & SIMONS, W., *Béguines et Béguines à Tournai au Bas Moyen Âge*. Tournai/ Louvain-le-Neuve, 1988.
- LAWRENCE, C. H., *Medieval Monasticism Forms of Religious Life in Western Europe in the Middle Ages*. London and New York, 1984
- LERNER, R., *The Heresy of the Free Sprit in the Later Middle Ages*, 1972.
- LUCAS, A.M., *Women in the Middle Ages. Religion, Marriage and Letters*. New York, 1984.
- LYNCH, J.H., *Simoniacal Entry into Religious Life, from 1000 to 1260: A social, economic and legal study*, Ohio, 1976.
- McDONNELL, E. W., *The Beguines and Beghards in Medieval Culture with special Emphasis on the Belgian Scene*. New Brunswick, New Jersey, 1954.
- MENS, A., *Oorsprong en betekenis van de Nederlandse begijnenen begardenbeweging. Vergelijkende studie: XIIde-XIIIde eeuw*. (Verhandelingen van de Kon. Vlaamse Academie voor wetenschappen, letteren en schone kunsten van België. Klasse der letteren, IX, af.7.), Antwerpen, 1947.
- MENS, A. Les béguines et les béghards dans le cadre de la culture medievale. A propos d’un livre recent E. W. McDonnel, Beguines and Beghards in Medieval culture, *Le Moyen Age* 64 (1958), pp. 305-315.
- MOREAU, E. de, Les « monastères doubles » ; leur histoire, surtout en Belgique. *Nouvelle Théologique* 66 (1939), pp. 787-792.
- NEEL, C., The Origins of the Beguines. *Sister and Workers in the Middle Ages*. ed. J. M. BENNETT, Elizabeth A. CLARK et. al. 1989, pp. 240-260.
- NEUMANN, E. G., *Rheinisches Beginen-und Begardenwesen*. Meisenheim am Glan, 1960.
- NIMAL, H., *Les beguinages, Origine, developpement, organisation interieure, influence*, (Annales de la Societe archeologique de l’arrondissement de Nivelles, IX), Nivelles, 1908.
- NÜEBEL, O., *Mittelalterliche Belginen- und sozialsiedlungen in den Niederlanden: Ein Beitrag zur Vorgeschichte der Fuggerei*. (Studien zur Fuggergeschichte, 23), Tubingen, 1970.
- OLYSLAGER, W. A., *Het Groot Begijnhof van Leuven*, Leuven, 1978.
- PETERS, G., Norddeutsches Beginen und Begardenwesen im Mittelalter. *Niedersachs Jahrbuch* 41/42 (1969/70), pp. 50-118.
- PATSCHOVSKY, A., Strassburger Beginenverforgungen im 14. Jahrhundert, *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters*, 30, 1974, pp. 56-198.
- PHILIPPEN, L. J. M., *De begijnhoven. Oorsprong, geschiedenis, inrichting*. Antwerpen, 1918.
- PHILIPPEN, L. J. M., Overzicht van de Geschiedenis der Nederlandsche Beginen. Leurs, S., Van Mierlo, S. F., Philippen, L. J. M., Stefens, A., *De Begijnhoven*.

- PHILIPPEN, L. J. M., *Het ontstaan der begijnhoven, een synthetische studie*, Amsterdam/ Antwerpen/ Mecheln 1943.
- SCHMIDT, C., Die strassburger Beginenhäuser im Mittelalter, *Alsatia*, 7 (1858-61)
- SCHMITT, J. -Cl., *Mort d'une hérésie: L'Église et les clercs face aux béguines et aux béghards du Rhin-Supérieur, du XIVe et XVe siècles*. 1978.
- SIMONS, W., *Cities of Ladies: Beguine Communities in the Medieval Low Countries, 1200-1565*. Philadelphia, 2001
- SOUTHERN, R. W., *Western Society and the Church in the Middle Ages*, 1970,
- STEFENS, A., De sociaal-economische betekenis der begijnhoven, *Steden en Landschappen*, 7 (1931), pp. 27-33.
- STEIN, F. M., *The Religious Women of Cologne: 1120-1320*. Ann Arbor, 1977.
- SUMMERS, J. I., *"The Violent shall Take it by Force": The First Century of Cistercian Nuns, 1125-1228*. Ph.D., 1986. Unpublished Thesis: The University of Chicago.
- THOMPSON, S., The Problem of the Cistercian nun in the Twelfth and Early Thirteenth Centuries. *Medieval Women. Dedicated and Presented to Professor Rosalind M.T. Hill on the Occasion of her Seventieth Birthday*. ed. K. M. WILSON, Manchester, 1984, pp.227-252.
- TARRANT, J., The Clemantine Decrees on the Beguines: Conciliar and Papal Versions, *Archivum Historiae Potifiae* 12, 1974.
- TEPE, W., *Begijnen in de Lage Landen*, Aalsmeer, 1987.
- VAN BUYYEN, L., Begijnen en Begijnhoven. *Spiegel Historiae* 8 (1973), pp. 532-541.
- VENARDE, B. L., *Women's monasticism and medieval society: Nunneries in France and England, 890-1215*, Cornell University Press, 1997

註記：本報告は 2000 年夏のシンポジウムの記録であり、報告の時点では Simons の研究を参照できなかった。文献目録には、それが McDonnell 以来英文で読める最もまとまった研究であるという理由で、追記した。